法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

個性論ノート(8) : アイデンティティと個性

SANUKI, Hiroshi / 佐貫, 浩

(出版者 / Publisher)
法政大学キャリアデザイン学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学キャリアデザイン学部紀要 / 法政大学キャリアデザイン学部紀要
(巻 / Volume)
9
(開始ページ / Start Page)
493
(終了ページ / End Page)
522
(発行年 / Year)
2012-03
(URL)
https://doi.org/10.15002/00007829

Hosei University Repository

〈研究ノート〉

個性論ノート⑧

――アイデンティティと個性――

法政大学キャリアデザイン学部教授　佐貫　浩

(一) アイデンティティと個性

(1) 幼児・少年期のアイデンティティ

人は、受身形において、その存在（be）を与えられる。その意味では自己の身体すらもが、自分自身にとっては「他者性」[(1)] を刻印された所有物として与えられたものとなっている。しかし、幼児における自分本位性は、自己の存在がその与えられた身体（have）に完全に乗っ取られたかの如くに、その身体の発する欲求が存在それ自体の声として外にむかって表現される。それはあたかも、他者性を持った身体を背負わされて誕生した幼児が、その生命を維持しているシステムとしての身体それ自身の欲求を、身体そのものに成り代わって（代理して）、自らの表情や泣き声によって、ケアしてくれる大人に伝達する役割を担っているかにも見える[(2)]。そしてある意味で、そのような身体優位のかたちで存在（be）と所有（have）は統合されている。

やがて自己意識（be）が獲得されて来ると、幼児は、自分の身体を使って、自己の欲求を実現しようとする。身体の一部分が意識に命じて、その身体の欲求を伝達するような仕方で行動するのではなく、目的を持って行動する主体が発達して主役となり、その主体が自分の固有の目的を実現するために、自己の身体（have）を道具として、自らの命令に服させるように格闘する。他者性を刻印された自己の身体を、自己の存在の実現のために働くものとして自己に統合するのである。もちろんほとんどの幼児は、自己の圧倒的な興味と内から

Hosei University Repository

発せられる強力な欲求に突き動かされて自己の体を使いこなす試行錯誤に挑戦するのであって、おそらく自己の身体が自分の命令を拒否するやっかいなしろものだということはほとんど意識しないままに――人間という生物に備わった遺伝的な高度な素質のおかげで――、身体を自己に統合する。

子どもは、幼児から少年期にかけては、本来は「子ども」としての特権を付与されて、自分のなかに展開していく興味や欲求のままに生きることが許されていたとみることができる。そして子どもに期待されたことは、固有の子どもの文化の中で自己の欲求を全力で生きることであった。そのような子どもにとってアイデンティティとは、まずは自己の生活と自己の欲求との無意識的な統合として、その子ども文化を生きることによって達成されていたととらえることができる。そしてそのような子どもの存在を、大人を中心とした子どもを包み込む共同体、あるいは親密圏が、無条件に価値あるものとして評価し、自らの共同体にとって不可欠なものとして受け入れることで、子どもは子どもであること自体を自己のアイデンティティとして生きることができた。いや、より正確に言えば、アイデンティティとは意識における自己統合作用であるとするならば、そのような意識による自己統合の必要を覚えることすらなかったと言えるかもしれない。

近代において、社会と個人とのあいだの関係が引き起こすアイデンティティ・クライシスは、青年期における新たな社会参加の入り口において生まれる。子ども期において無条件に受け入れられていた子どもとしての人間存在は、多様な職業的参加の入り口において、その選択肢をどう選ぶかにかかわって主体的な決断を迫られ、自己と社会との再統合を求められる。そして危機を含んだ選択の決断によって、自己の社会的存在価値を再確立（取得）することによって、新たなアイデンティティが獲得される。

(2) 現代競争教育システムがもたらすアイデンティティ危機の様相

しかし、このような幸せな子ども時代は現代においては剥奪されている。成年期に通過しなければならないアイデンティティ・クライシスが、子ども期にまで引き下ろされてきている。日本の高度成長期において、大衆的な規模で、職業選択と学歴・学力競争とが深く結合されてしまった。職業への選択的参加

Hosei University Repository

期において青年が引き受けなければならないアイデンティティ・クライシスは、自己自身の目的（何をしたいか）を、社会にとっての自分の価値（何をするべきか）と再統合する危機として到来する。しかし、現代の職業選択のための学校教育制度のなかの競争過程は、全ての中学生を――また私立中学受験のなかで小学生をも、さらには私立小学校「お受験」においては幼児までをも――、この職業選択競争と結合された学力で示される社会的価値基準に照らして、自分の値打ちを証明することを迫るようになってしまった。しかしその危機は、多くの子どもにとっては新たなアイデンティティの形成（自己と社会との再統合）へと展開することが非常に困難な危機として襲いかかってくる。

唯一可能なアイデンティティ取得の方法は、学力ランクを基準として自己の位置取りを、より高いところに得ることである。そしてその高い位置に対して親や社会が与える評価によって、自分の価値が照らし出されるという仕方で、存在価値を「証明」することである。しかしそれは競争の勝者にのみ可能な方法であり、多くの子どもはアイデンティティの剥奪をこそ味わうこととならざるを得ない。それは、たとえ格差があるとしてもすべての子どもに職業というリアルな社会参加への道が提示される中でのアイデンティティ・クライシスと決定的に異っている。

皮肉な見方をすれば、いま流行の「キャリア教育」なるものの多くは、未だ職業的選択の発達段階に到達していない子どもに対して、「青年期」的な選択意識の形成――職業選択によるアイデンティティ形成――を迫ることで、いま子どもが無理矢理引きずり込まれている人材形成競争（学力競争）の意味を自覚化させ、この競争に「主体性」を持って参加させようとする、途方もない企て――決して成功することのない――というべきだろう。あるいは厳しい競争の現実をより早く知らしめることによって、この競争という価値に照らして自己の価値を証明するという方法――現代社会の支配的仕組み――に順応させる試みかもしれない。

いずれにしても、アイデンティティが本格的に問われる局面は、近代というものの社会性格と深く結びついている。前近代においては、子ども期の存在の価値は、深く共同体（家族という親密圏と地域共同体）のなかに埋め込まれていたのであり、近代において職業的参加が世襲制を離れ、慣習的儀礼を介する

Hosei University Repository

だけでは達成されなくなったときに、社会における青年の主体的役割取得に挑戦する個人の側の営みが、アイデンティティの再構築の過程――すなわち近代的青年期――として出現したのである。ところが後期近代とも言うべき現代（ポストモダン）においては、家族という親密圏の解体を伴いつつ、職業的参加の競争が少年期にまで早期化、浸透し、この競争に照らして自己の価値を少年にまで厳しく問い詰める事態が広がってしまったのである。そしてそのため、少年期や思春期（青年期前期）の子どもたちが、周りの大人からの深い「受容」を奪われることに加えて、自己の価値を証明するための競争的営みに追い込まれていくという異常な――発達段階的にみてその課題を達成する条件を欠いたという意味において異常な――困難状況が、子どもたちを襲っているのである。少年期におけるアイデンティティ問題とは、ポストモダンにおける人間の価値の商品化の浸透に伴って、子どもを無条件に価値ある存在として受容する関係性が失われたことによる存在のクライシスが引き起こす難問に他ならないのである。激しい学力競争が引き起こす子どもの自信喪失、受験競争などからの脱落や親からの「見捨て」による自己放棄、時には自殺などの子どもの苦悩と困難は、そういう意味でまさにポストモダンにおける子どもの存在危機の現れというべきものであろう。

(3) 自己の身体との対立――自分を受け入れられない危機

1) 身体とアイデンティティ

そこで進行する人格的危機の性格をもう少し立ち入って検討してみよう。この競争的人間評価の枠組みの中で、「主体的な自己」の代わりに「評価する他者」が自己の行動を操作する。その「評価する他者」が「自己」の人格を乗っ取る時、その人格は競争を自らの目標とも欲求ともして生きるという状態へと移行する。そのような状況において「私」(be) が対する自己の身体 (have) は、その競争目標を達成する道具として把握される。問題は、そのような課題に応えられない身体であるとき、「私」にとって自己の身体は、自分を実現させてくれない、自分で引き受け背負うことのできない身体として、身体に対する拒絶、あるいは絶望の感情が引き起こされる。拒絶してもそれから逃れられないとするならば自己に絶望を背負わせる重荷として、自分の身体（have）を引

Hosei University Repository

き受けなければならなくなる。アイデンティティ、すなわち自己同一性にとって、「私」と「私の身体」との一体感は、不可欠な前提あるいは基盤となるが、「私」は「私の身体」と和解できない敵対状況に陥る。アイデンティティは、アンソニー・ギデンズのいうように、ハイ・モダニティの社会においては、絶えざる変化に曝されて襲ってくる自己の存在不安を、次々に変化する社会との関係性を主体的に作り直すことをとおして再構築しつづけるほかないものとなる。ギデンズの言うように、「モダニティという環境では、変容する自己は個人的変化と社会的変化とを結びつける再帰的な過程の一部分として模索され、構築される」(3) ものとなる。

「ポスト伝統的な秩序においては、自己は再帰的プロジェクトとなるのだ。個人の生活の変遷は常に心理的な再組織化、伝統的文化においてしばしば通過儀礼というかたちで儀礼化されたものを要求する。しかし伝統文化では、ものごとは集合体のレベルで世代が代わっても多かれ少なかれ同じでありつづけるため、変化したアイデンティティ――青年期から成年期への変化のような――ははっきりと確認された。対照的にモダニティという環境では、変容する自己は個人的変化と社会的変化とを結びつける再帰的な過程の一部として模索され構築される。」(ギデンズ『モダニティと自己アイデンティティ』36 頁，傍点引用者)

そこでは「自己アイデンティティ」が「一人の人間の行為システムが継続している結果として与えられるものではなく、むしろ、人間の再帰的な活動の中で常に作られ、維持されなければならないもの」(57 頁) となる。そういう中では、生活過程の全てがアイデンティティの再帰的構築のプロセスとなる。そしてライフスタイのルーティーンの一つひとつが、「どのように行為するかについてだけではなく、誰になるかについての決断」(傍点引用者) となる (4)。加えて、「後期モダニティにおいては」、「身体」が「……ますます社会化され、社会生活の再帰的な組織化に引き込まれ」(110 頁)、「身体が近代的再帰性の一部」(115 頁) となる事態が生じているとギデンズは指摘する。その結果、「私たちは、自分自身の身体をデザインする責任を負うようになった」(115 頁、傍点引用者) のである。

「私たちすべてが各自の身体に特権を持ち、またその身体を持つことを運

Hosei University Repository

命づけられ、そのうちに住みついており、幸福や楽しみの感情のもととなるが、しかしまた身体は病気や緊張が生じる場所でもある。しかしすでに強調したように、身体は単に私たちが『所有』する物理的物体ではなく、行為システム、プラクシスの様態であり、身体が日常生活の相互行為に実践的に埋め込まれていることが、自己アイデンティティの一貫した感覚の維持にとって重要なこととなる。」（同上、111 頁）

現代における激しい拒食症は、まさに身体アイデンティティ問題の病理と言うべきものであろう。「 自己アイデンティティと身体の再帰的構成 」（同上、121 頁）の失敗が引き起こす身体への拒否感が引き起こす「身体の『よそよそしさ』――個人が身体にくつろぐことができないこと――は、拒食的な体制がなぜ時々実際に『死ぬまで断食する』ようなレベルまで追求されるのかということの説明となる」（同上、121 頁）のである。

2）学力・能力を身体性としてとらえる

私が「 身体性 」にこだわろうと考えるのは、学力と能力を、その身体性という特徴において把握することによって、学力や能力がアイデンティティ形成において果たす役割やアイデンティティ崩壊の様相をするどくとらえることができるのではないかと考えるからである。そうすることで、学力や能力がアイデンティティ形成、再構築にどういう役割と位置を持っているのかを考察する一つの有力な方法が見いだせるのではないか。

身体とは、「体」という物理的・生物的な実態として「私」に与えられている「物＝所有物」と把握できる。そこに「自己」は宿っている。しかし「私」という自己意識が形成されるとき、「私」はいったんこの「身体」から脱出する――断っておくが、そのことは意識を身体、特にその頭脳というもの作用としてとらえることを否定するものでは全くない――。そしてその瞬間、身体は、「私」の目的を実現する手段となる。「身体」は、「私」自身ではない「他者」（「他物」）になり、私の目的を実現する手段となることを介して「私」のものとして再統合される――されなければならない――ものとなる。すなわち、私の「他者」としての「身体」は、たえず「私」の実現という行為を介して、「私」に再統合されつづけなければならないものとなる。学力や能力もまた、身体の持つ力、性格として「私」に与えられる。スポーツ能力や表情、演技力、特殊な才能な

Hosei University Repository

ども、身体として「私」に与えられるものと把握ができる。

しかしそのことは「能力不全」や「高い能力を持ち得ない無念」もまた「身体性」として背負わされるということを意味する。激しい能力・学力競争に曝されて、その下で学力を高める課題に挑戦させられる子どもたちにとって、そのことは、身体に組み込まれた自分の学力・能力を背負いつつ自分のアイデンティティを再形成していかなければならないことを意味する。しかしそこには根本的な矛盾、あるいは危うさがある。なぜならば、そこでは自己のアイデンティティは、高い学力を持つことによる他者（社会）からの賞賛や評価を獲得することでのみ実現されるものと捉えられてしまうからである。しかし「順位」は、それ自体として生活を意味はしない。高い「順位」は、多分、将来における自分が望む価値ある職業をある程度確かに約束してくれるであろう。しかしそもそも多くの子どもにとって、将来の職業的地位獲得への希望を、いま生きることを十全に意義づける目的としてとらえることは困難だろう。結局競争に勝つことを目的として生きることは、極度にそのアイデンティティを不安に曝す。敗者はアイデンティティを奪われる。いつ敗北するかわからないという事情が、絶えず自分の存在を不安にさらす。

それに止まらず、競争という磁場が、そこにおかれた人格から引き出す競争参加の意欲は、奇妙なことに具体的な活動意欲――○○をしたいという目的を持った意欲――ではない。競争という場によって人を順位化するために判定者によって課される課題――いわば重荷としての課題――を引き受けなければ自分の存在意味を剥奪されてしまうという不安や恐怖によって引き起こされる意欲である。それは自分の主体的な目的を欠いた生き方につながる。そのような状況において、多くの子どもたちは、学習という営みを、アイデンティティの結晶としての作品性に結実しないハードワーク（重荷・負荷）として挑戦し、順位というこの上なく不安的な自己存在証明を追い続けることを強いられる。その結果、多くの子どものなかで、自己の学力や能力――身体性として子どもが担わされているもの――と「私」との再統合が困難となる事態が生まれる。それは再び身体を他者化する。要するに、こんな能力のない自分を背負わされて、もう私は生きていく希望を持つことはできないという思いに打ちのめされるのである。自分の身体――学力や能力、おそらく運動能力を含んで――を引

Hosei University Repository

き受けることへの絶望である。身体の表情やコミュニケーション力として機能する身体感覚、あるいは暴力的なサバイバル空間を生き延びるために必要な腕力、等々もまた、生きられない現実から脱出するパワーを持ち得ず、自分に絶望を強いるかに思われるとき、それれらの身体の全てが、背負うことができない他者（他物）として、自分に対立してくるのである。

ここでいう作品性とは、そのものを創造すること自体が、自己と社会との再統合であるような性質を持っていることを意味している。具体的にはそれが、自分の主張であったり、思いの表現であったり、自分の固有の目的を達成するための手段の獲得であったり、自分の課題を解明する論理の発見であったり、というようなことを意味している。それはその達成の度合いが他者のそれとの比較によって得る抽象的な「順位」の価値にかかわらず、何らかの程度において自己自身の実現を直接に担っている。しかし競争的な順位獲得の営みはそういう作品性を伴わないのである。

(4) アイデンティティと個性の関係

存在の固有性という視角から捉えられる個性概念にとって、所有（have）の形で与えられるものを絶えず自己に統合することなしにはアイデンティティの再構築はできない。確かに学力や能力などは、その獲得物を「所有物」として他者と比較するならば、どれだけの量、質を所有しているかが比較可能になる。そして労働力市場において、その所有物が商品（労働力商品）として市場競争にさらされるなかでは、他者の目的（資本の目的としての商品の生産、あるいは剰余価値の獲得）にとって、その労働力商品の比較的な価値が最も重要になる。しかし、人間の存在価値は、まず何よりもその生命を主体的に生きるということそのものにある。そして個人は、そのような自己実現のために自分に与えられたもの（所有物）に依拠して他者との関係性、社会との関係性の再構成を試みるほかない。それは何よりもまず、自己と自己の所有物としての身体との再統合――自己の存在を実現するための手段として身体を使いこなし、存在の目的を実現すること――として出発するほかない。その時、自己の身体は、自分の存在の固有性を担い、自己の個性の不可欠の構成部分となる。

重要なことは、そのようにして所有物（have）としての身体が自己の個性

Hosei University Repository

を担うものとして機能し始めるとき、その身体は、自分にとって親密なものとなり、それを背負うことこそが自己の希望を切りひらく道としてとらえられるということである。そして多くの欠点や困難をその身体が抱えていようと、それを背負って生きることが可能となる。そして「私」のアイデンティティの不断の再統合の過程において身体に課される（課す）学習と訓練の過程は、生きることの一環として、そしてアイデンティティの再帰的な構成過程として、生きることそのものと統合された主体的な営みとなる。そのとき自己の身体――その一環としての学力や能力を含んで――と自己との「和解」が成立し、「私」は、自己の身体を自己のアイデンティティに統合された親しい自分として受け入れることができるようになるのである。

しかしそのためには、学力や能力が、「私」の存在を担うものとなるという質の転換が不可欠となる。学力についてその質の変化を見てみよう。応用力、つながり力などが学力に付与されるのは、その学力が孤立した所有（have）物として獲得されるのではなく、存在それ自体を実現する力として獲得されるという関係のなかにおいてである。すなわち、学習するプロセスが、存在それ自体が生きるプロセスとして展開するときに、学力は、存在（be）の実現のために自らの固有の課題を解くことのできる応用力と創造力を持ったものとして求められるからに他ならない。ところが、学力の獲得が、単なる所有（have）物の出来具合を競い合う過程となるとき、その学力は固有の目的や固有の関係性を担うものとはならない。順位を比べるために出題される「応用問題」を解くのに必要な「応用力」という矮小化された応用力しか獲得されないのである。コミュニケーション力も、学力の一つとして重視されるようになっているが、それは個々の存在（be）を実現し、他者との関係に「参加」するためにこそ必要な力である。その関係性を発展させること――すなわち他者と共に生きる生活の創造――なしに、ただ学力という所有（have）物に「関係性をになう質」を刻み込もうとしてもなかなか成功しないのである。

(5) 存在（be）としての個性と所有（have）としての個性について

今日においては存在（be）としての個性と所有（have）としての個性とが、共に個性として把握されている。もちろん、私の個性論においての基本は、存

Hosei University Repository

在の固有性として個性を把握するということに変わりがない。そのことを前提として、ここでは、二つの個性概念の対抗と関連について触れておこう。

今までも検討してきたように、資本主義的生産の仕組みの中では、労働の局面においては、市場の論理において have の論理が浸透する。しかし労働過程においては再び存在（be）の意味が意識されることがある。人々が協同的な労働を進める過程では、そのなかで、自己の存在の固有性、役割が照らし出されることで存在（be）としての個性が再び意識され、また一方で競争空間にさらされることにおいては所有（have）の論理が肥大していく。教育と学習においても、存在を実現するための学力の獲得・形成と、他者のそれと比較することをとおして自己の労働力商品としての価値を高める学力との対抗が存在することについて触れてきた。

そのことからも分かるように、存在（be）と所有（have）との統合の有り様こそが個性の存在様式を二分する。真の存在を核とした個性の実現にとっても、所有（物）は不可欠であり、存在によって所有（物）が統合されることが欠かせないのである。より積極的にいえば、学習の過程とは、自己に身体として与えられた所有物を、自己の存在に統合するための身体（所有物）の発展（発達）と組み替えの過程としてこそ進めなければならないのである。その意味で学習（＝教育）の過程は、個性実現の過程としてこそ実現されなければならない。

この視点からすれば、人間の存在要求と所有要求は、存在の側のイニシャティブによって統合されて、主体的な要求として発展させられなければならないと見ることができる。病理は、所有そのものが、そして所有の多寡が、他者の所有との差異（より多くより豊かに所有すること）が、自己目的化することにある。そう考えるならば、次の把握は、一面的であろう。

「脱工業化社会つまり知識社会とは、人間が存在欲求という幸福を追求できる社会である。つまり、工業社会では貧しさが解消されず、所有欲求を充足するために、存在欲求が犠牲にされてきたのに対し、知識社会では人間の人間的欲求である存在欲求そのものを追求できるとされる。」（18 頁）

「新自由主義の『競争社会』は、所有欲求が存在しなければ機能しない。所有欲求を『飴と鞭』にして、労働を強制させなければならないからである。」「……この危機を打開することこそ、新自由主義的教育改革の重要な

Hosei University Repository

目的となる。つまり、人間的な存在欲求を目覚めさせずに抑圧し、所有欲求を吹き込むことである。／しかし、すでに所有欲求が衰退し、存在的欲求が覚醒しているもとで、存在欲求を抑圧しようとすると、社会的病理が噴出してしまう。それどころか結果として産業構造の転換も進まないのである。」（神野直彦『教育再生の条件ー経済学的考察』岩波書店、2007 年、16－20/121 頁）

肥大化させられた所有欲求、そしてそれを充足させる過剰所有の広がりにもかかわらず、存在欲求が実現されないのは、その所有が存在の実現へ統合されていないことに根本の原因があるからに他ならない。そしてその原因は所有（物）が他者のそれとの比較によって価値評価される様式の下で獲得されることにあるのである。

また、今日の日本の資本主義社会において、すでに物的財貨（富）の配分がすべての人々の生活を支えるものとなっているとはいえない。むしろ 90 年代後半からの新自由主義的社会改変の下で格差・貧困化が進み、多くの人々の存在欲求が、所有（物的富の配分）が格差化され、差別化されている故に実現を阻まれている。そのなかで、所有欲求（富の配分の平等性、最低賃金保障等の要求）が高まっていると見ることができる。また「存在的欲求が覚醒している」ということはできるとしても、労働力商品としての人格規定を不可避とする資本主義的生産の仕組みは、個人の存在（be）と所有（have）との矛盾を絶えず生み出している。資本主義という現実のシステムの下で生きることが自己存在を実現することとの間に絶えず矛盾を生み出す事態は、一向に改善されていないだけでなく、むしろ困難は拡大している。

また「知識社会では人間の人間的欲求である存在欲求そのものを追求できると」という認識は、必ずしも神野氏自身の認識として語られているものではないとしても、楽観的にすぎる。知識基盤社会という時代把握がおそらくそれに重なる。資本の目的を自己の目的として主体的に生きることができるエリートにとって自己実現が可能な「知識基盤社会」であり得るとしても、その底辺で広範に展開している低賃金、単純労働、単純サービス労働が、そのままで存在欲求を実現する労働形態であると見なすことはできない。いずれにしても、存在欲求と所有欲求との新しい段階での統合の条件が現実の中に、自動的に整い

Hosei University Repository

つつあるとする認識――矛盾を含んで新しい条件が成長しているということはあるとしても――はオプティミズムというほかない。

(二). アイデンティティと「関係性」への参加の構造

存在の固有性を浮かび上がらせるものはその存在が組み込まれている関係性に他ならない。個の存在（be）は、完全に孤立した状況においては、自己の存在の固有性を証明する方法を持たないのである。

そもそも自己創造とは、他者との関係の中で、そして関係性に変容を及ぼすものとして遂行していく他ないものである。全く他者と断絶された空間においては、自らの存在の意味それ自体が成立し得ないのであり、意味のないところにおいて、自己の意味を紡ぎ出すことなど不可能である。その点では、自己の存在の不可欠性は、他者からの評価を支えとしてこそ証明可能なものとなる。しかしだからといって完全に他者からの評価に依拠するならば、個性とは、他者の求めに応じて徹底的に受動的であることによってより完全に実現されるものということになってしまう。他者に求められることにおいて自己の存在の不可欠性が証明されると共に、その求められる自己が同時に主体的な自分自身であることが、個性実現の条件となる。自分を主体的に創造することが同時に他者にとって不可欠な自分の創造であるようなプロセスに入ることが個性実現にとって必要となる。

そのような個性を実現するためには、人は、その関係性それ自体を自ら主体的に作り出さなければならない。それは結局、主体的な自己実現過程を他者もまた新しい協同の発展として共に生きてくれるような関係を作り上げていくということだろう。それは、自己と社会との相補的な創造過程を主体的に担っていくことであろう。

現代社会における関係性の変容の基本的性格は「物象化」として把握することができる。それは人間の取り結ぶ関係が、資本主義社会では、商品を介して取り結ばれる関係として転倒して表れることを意味している。人と人とが日々の生活において直接的人格関係として不可分に繋がっていて、その関係性が感情や意欲をともなった人格関係としてリアリティーを持って生きられていて、

Hosei University Repository

その関係性の中に自分の存在が日々刻み込まれるという状態が、自分の存在の固有性を証明してくれる。ところが、資本主義的生産の仕組みは、本来は労働を介して，さらには労働の生産物を介して人と人との共同性が実現されるという関係を、資本による商品生産と市場における商品交換関係へと置き換える。

その物象化は、ポストモダンの現代においては、社会生活の隅々にまで浸透する。物的商品の生産、流通、消費関係として人間の共同性が現象するに止まらず、家族などの親密な人格的結合関係すらもが商品消費関係へと組み替えられていく。さらに携帯電話などのハイテク商品が介在するようになり、コミュニケーション過程自体が商品（の消費）によって媒介されていく。携帯電話の急速な普及は、それ自身が直接的な関係の物象化を意味するものではないとしても、おそらくそれが介在しない状態において営まれたであろう直接的人格関係を、間接的な人格関係（face to face の関係を欠いた電子情報のみの交換関係）へと置き換えることで、これまた大きな関係性の変容をもたらしているに違いない。

中西新太郎氏は、今日における個性をめぐるポリティックスが、「関係性の収奪」という商品社会の論理、そしてそれを社会システムへ徹底的に浸透させようとする新自由主義の仕組みのもとで、新たな展開の様相を呈しつつあることを指摘している[(5)]。

市場的商品化を極限にまで推し進める社会として新自由主義社会が登場し、それが「関係性を収奪する」というメカニズムが働いている。新自由主義社会の大きな特徴のひとつは、物の生産と消費の過程を商品を媒介としたものへ組み替えるに止まらず、多様に営まれる直接的な関係性それ自体を市場の機能によって代替しようとすることにある。その典型として、たとえば、政治的公共性の組み替えがある。新自由主義は、直接的人格関係としてのコミュニケーション関係をとおして作り上げられる政治的公共性の世界――政治における民主主義的合意のシステム――の作用を、市場によって――人びとの意識性を介することなく――代替的に創出しようとする。

関係性の変容の問題を、ここでは、主に、親密圏と政治的参加の場面に即して検討する。

Hosei University Repository

(1) 親密圏の変容とアイデンティティの変容

家族等の親密圏における共同性の問題を検討しよう。親密圏における共同性は、少数の他者とのあいだにおいて創造されるものである。家族、近隣関係、友人、小グループ、等々である。そこでは、少数の親密な他者とのあいだに、共同の目的、あるいは相互の自己実現を互いに支え合う関係が作り出される。しかし同時に、そのような直接的な親密性を介して作られる関係性は、その親密性や対等性が直接そこに関与する人びとの人格のありように依拠しているために、そしてそういう人格における対等性や平等性の現代的な困難性の故に、そこに大きな歪みや矛盾、支配や従属、その結果としてのアイデンティティの剥奪や個性の喪失を引き起こしてしまう。たとえば、ジェンダー差別を大きく組み込まれた現代の雇用システムは、家族における夫婦、男女間の平等性を大きく疎外し、親密圏におけるジェンダー平等を妨げる。

また親密圏の現代的な困難は、この親密圏自体の解体として展開している。すでに日本において、単身家族の割合が最も大きくなっている。1980 年段階で 19. 8%だったものが、1995 年に 25.6%、2010 年時点で 31.2%を占めるに至った。2000 年からは、半数を超える世帯が 1 人か 2 人暮らしという状態にある[(6)]。また 2002 年時点で、18 歳未満の子どもを持つ 2 人世帯の相対的貧困率は 68%という試算統計も出されている[(7)]。現代の日本社会では、家族という親密圏において安定した関係性のなかで生きることができるという条件が多くの人々から喪失されつつある。

また地域の子ども集団が奪われて、幼児から少年期における友人関係（子ども集団）という親密圏が、多くの子どもに体験されづらくなっていることは、指摘されて久しい[(8)]。それは自己の存在を意味づけ、日々の目的を与える関係性の希薄化を意味する。そして競争的な人間評価の指標がそういう浮遊した個人を脅迫的にとらえる。しかし親密圏を剥奪されるような悪条件におかれた子どもたちに取って、この競争的土俵において成功することはより難しいものとなる。そのような困難な事態が、アイデンティティの再構築という課題を、低い年齢の少年――その課題に対して対処する条件をいまだ十分には持ち得ていない年齢期の少年に――に、そしてより貧困にさらされた子どもに背負わせるようになる。

Hosei University Repository

あわせて、福祉や教育や保育というような、人と人との関係性を取り結ぶことそれ自体が目的とされ価値として創造される営みもまた、市場を介して提供される商品（商品としてのサービス）の消費へと組み替えられ、利潤を生み出すプロセスへと包摂されていく。

まずは共同体や親密圏に埋め込まれていたケア関係が、それを可能としてきた時間や資本の剥奪――たとえば地域の遊び場の喪失、あるいは両親の長時間労働の拡大などとして――によって、親密圏から奪われ、空洞化し、商品の消費がそれを補填する。24時間営業のコンビニ商品は、家庭が作り出す親密圏内の相互人格的なサービスを、まさにコンビーニエントな商品として提供し、家族が交流しあう直接的な人格的協同関係の解体を促進する。しかしそういう事態に対して、社会的な保育やケアの制度化が試みられる。公的な保育や教育、福祉が、そのサービスの向上を責務とした専門性を携えた公務労働者の形成を伴って、拡充されていく。(9)

ところが、そのような社会化された共同性においても「関係性の収奪」が進行しつつある。公共的なシステムによってサービスが提供されてきた福祉、教育、保育などが、市場的なサービスに置き換えられる。市場的なサービスシステムにおいては、その最大の目的は利潤の獲得になる。そこでは、対人関係サービスは基本的には時間単位の価格で販売されるものとなっていく。そこでは対人関係サービスは、受給者の権利として供給されるものではなく、対価を支払って買い求める商品となる。そこで作り出される対人サービス商品の「製造」の最も基本的な目的は、利潤の創出におかれる。したがって、いくら対人サービスについての要求が存在しているとしても、それが利潤を生み出さないとすると、資本にとってはその部門の経営には何の魅力も存在しないこととなる。公共的なサービスが、利潤の論理によって創出されるのではなく、必要と権利の実現の視点から、公的資金の支出を財政的基盤として取り組まれるのとは全く異なって、資本の論理が、そのようにして権利実現のための対人サービスの領域に組み込まれる。しかも現在進行している公的サービスの民営化、あるいは民間委託化は、多くの場合、公的支出の削減、民間資本への市場の提供を目的として推進されているために、サービスの格差化を生み出さざるを得ない。しかも経費削減（すなわち企業利益の拡大）の最も手っ取り早い方策

Hosei University Repository

が非正規低賃金労働の導入であるために、労働者の専門性の向上、労働への熟練等が困難となり、またケア労働にとって不可欠な一定の継続性（親しい関係性を創り出していくための同一職場での雇用の継続性）もまた失われることが多くなってきている。もちろん、民間資本によるケアサービスの提供であっても、それが、一定の国家的基準の下で行われ、またその水準を満たすための公共的支援が行われるならば、そういう問題点を克服する可能性がないわけではないが、現代日本における公共サービスにおいては、そういう国家基準性や支援は、各種の規制緩和の進行の中で、非常に脆弱であると言わざるを得ない。そのため、共同体や家族から剥奪された人格的ケア関係は、新たな保障の仕組みを見出せないままに、値段付きの福祉・教育商品として販売されることになる。そこでは金の切れ目は関係の断絶を意味することとなる。(10) 人と人との関係によってつながるという過程はそのサービスの対象者である子どもや老人等々、サービス労働の提供者である保育士や教師、介護士等々の双方から奪われていく。

(2) 政治的参加とアイデンティティ

1) 民主主義の政治と市場的公共性

民主主義政治は、人びとが政治に参加し、社会の統治と管理に直接関与し、コミュニケーションを取り結び、合意や了解を形成していく過程としてとらえられてきた。すなわちそれは関係性の構築の過程であり、しかも直接的な人格的交流関係の構築を意味する。そしてそのような民主主義を介して創り出される新たな公共性は、そこに参加するものにとってのアイデンティティの基盤を提供する。政治は、ある意味で人間の共同性の実現過程である――もちろんそれは「共同幻想」に転化する深い可能性を伴っているが――。

民主主義という仕組み、特に意識的にコミュニケーション的民主主義として把握された民主主義は、直接的なコミュニケーションを伴う人格関係を介して実現されるものである。ハーバーマスは、「コミュニケーション的行為というのは参加している行為者の行為計画が……了解という行為を経て調整される場合である」(11) とし、「コミュニケーション的に達成された同意は、規範的一致、命題的知識の共有、主観的な正直さへの相互信頼という三つのレベルで相互主

Hosei University Repository

観的な共通性を持つ」としている。「規範的一致」とは、「自分と聞き手とのあいだに正統だと承認された相互人格的関係が成り立つように、所与の規範的脈絡に照らして正統な発話行為を遂行すること」（傍点引用者）を意味する。またこの三つのレベルに対応した「正当性」「真理性」「誠実性」を持ったコミュニケーションのための発話行為は、「相互人格的関係の樹立や修復」に「役立つ」とも述べている[(12)]。

ハーバーマスは、このようなコミュニケーション的行為による民主主義は、新たな政治的公共性を生み出すとする。ハーバーマスの理論で重要なことは、システムと生活世界という二つの側面において社会のダイナミズムを把握していることである。資本主義的な市場経済の仕組みと近代的国家行政機構によって構成されるシステムは、人びととその生活世界をとらえ、資本主義の仕組みへと統合していく。人びとはこの巨大なシステム――利潤追求のための経済システムと巨大な官僚機構――に囚われて、社会変革的契機や人間的価値によるシステムの批判的対象化、社会の組み替えへの主体性を剥奪されていく。ハーバーマスはそれを「システムによる生活世界の植民地化」ととらえる。ハーバーマスにとってはコミュニケーションとは、そのような生活世界の植民地化によって眠り込まされた社会矛盾についての意識を、コミュニケーション的合理性の世界において復活させ、生活世界における矛盾の展開を社会変革への合意とその主体性の形成として機能させる方法、あるいは場として把握されている[(13)]。

このような民主主義の過程を視野におくとき、新自由主義は、そのようなコミュニケーションによって担われる直接的人格関係によって実現される公共性を、市場の「見えざる手」によって公共性が実現されるという論理に置き換える。また、政治的合意による公共的なサービスを提供する公的仕組みを解体し、それらの公共的サービスを市場の論理にしたがって企業の商品として提供するシステムに組み替えることが、効率的であるとする。あるいは各種の企業活動や市場に対する政治の側からする干渉と規制が市場の効率を疎外しているとして、政治の関与を排し、規制緩和を大幅に進める。人びとは他者とのコミュニケーションなしに、また他者の利害との主体的調整なしに、したがって他者を理解する必要なしに、自分の欲求と利害本能にしたがって、すなわち「利己的

Hosei University Repository

に」行動するだけで、人と人との関係が調整され、社会が、いや最も効率的な社会がそこに実現されるとするのである。新自由主義は、人びとの政治参加の民主主義が紡ぎ出す人格的な関係を解体し、人びとを市場における孤立した利己主義者の位置に置くことが新たな秩序と高い効率――市場的公共性――を実現するとするのである。このようにして、コミュニケーションを介した民主主義と参加に対して、絶えず市場的公共性が対置され、人が直接つながり、社会に対する主体性が形成される契機――ハーバーマスの理論においてはコミュニケーション的合理性による新たな社会変革への公共的合意の創出の過程――を奪い取っていくのである。

2）アイデンティティの社会性

アイデンティティの獲得という視点から見ると、次のような政治への参加の問題についても検討しておく必要がある。それは社会生活における政治的関係性への参加である。ここでは政治という概念を、現代社会生活において不可避となっている諸ポリティックスへの参加と関与という意味において使う。具体的には、民族や国籍、ジェンダー、地域住民としての参加、階級、資本と労働との対抗（労働運動への参加など）、マイノリティー集団としての連帯、各種のＮＰＯ活動等々への参加、などを意味する。（労働参加は同時に階級的アイデンティティの形成への契機となるが、労働参加それ自体は、労働が持っている本源的な共同性の実現のプロセスという意味において、ここで言う「政治への参加」とは区別して扱うこととする。）

アイデンティティという概念は、エリクソンにおいては、主として人間の成長・発達段階において達成されるべき自己と社会との再統合を把握する概念として提起されたものであった。しかしその後の展開においては、むしろ中心的にはここでいうような社会的、政治的な所属による自己の立ち位置と課題の選択､自覚という意味に重点が置かれて使われてきた経緯がある。その背景には、国民国家の時代において強烈なナショナリズムが展開し、人を民族的所属によって区別し差別する社会秩序が拡大し、さらに国民国家による領土拡大と侵略、植民地化のなかで、人びとの人権や生存すらもがその国民としての位置や民族的出自によって大きく左右されたという厳しい歴史的時代が展開した――

Hosei University Repository

している――ことがある。その下で、帝国の側に立った人びとはこのナショナリズムという自己存在の意味づけの回路に囚われて、帝国主義を内面化し、他民族や社会的マイノリティーに対する差別や時には抹殺に対してすらも協力、加担する事態が生まれたのである。また、そういう苦難を克服していくためには、自らの出生として背負わされた歴史的、民族的課題を自覚的に引き受け、社会の発展のための歴史的な変革課題を担うことによってこそ歴史変革主体として自己を形成することができるとする自覚がそこに込められている。その文脈のなかでは、アイデンティティ概念は、強烈なナショナリズムによる自己の存在の意味付与、その権力的、帝国主義的社会統合に対して、他者との平等的共生に道を開きうる形で、如何に自己の存在の意味を主体的に獲得しうるかという課題を背負った概念として展開されてきた経緯がある。さらに現代の多国籍資本や開発国家による近代化の過程は、各種のエスニック集団において保持されてきた「共同性」を強烈かつ排他的なアイデンティティ・ポリティックスの空間へと引き出す。(14)

3）アイデンティティの「私秘化」

しかし日本社会の高度な消費社会化のなかで進行している事態は、そのような政治的アイデンティティをめぐるポリティックスの激しい展開とは様相を異にしているように見える。非常に大きな困難や矛盾を生きつつも、その原因についての認識が極度に「自己責任化」されているために、その共通の所属性（階層やエスニシティや職業集団や社会的地位、所属する地域、等々）に依拠した「われわれ」と呼びうる集団への帰属意識が欠落し、「われわれ」に対する共通の社会的仕打ち（差別や不当な処遇、権利剥奪、等々）として自分にふりかかっている社会的な困難を受け止めることが非常に難しくなっている。困難を共有する他者（「われわれ」）を認識できない孤独は、その困難性に立ち向かう主体形成へと反転させるアイデンティティ形成につながらないのである。それらは現代の日本人の極度の個人化、孤独化がもたらした現象と把握することができよう。中西新太郎氏は、そのような事態をアイデンティティの「私秘化」ととらえている。

「日本におけるアイデンティティのとらえ方の特質は一言で言うと、私秘

Hosei University Repository

化の深い浸透を背景とした特異な私的性格にあるといえます。西平直さんが指摘されているように、エリクソンのアイデンティティ観念はそもそも、成長なり社会化というものの社会的な枠組みや性質と切り離して考えることができない。したがって民族的な出自であるとか、あるどこかの集団に属するという問題と、アイデンティティ帰属の問題とは切り離して考えることができないわけですが、日本の場合、消費社会化の進行の中で、アイデンティティ問題が、『わたし探し』、『自分探し』として定式化されてきた。その結果、アイデンティティのありかたをもっぱら私的にのみとらえる感覚が極度に進行し、アイデンティティの社会的な基礎を問いかけたり、あるいはアイデンティティを社会化する手がかりを失ったかたちでアイデンティティの問いが提起されることになった。この傾向は、先ほども言ったように、消費社会と 90 年代の変化とが、私秘化の点では連続しているだけではなくて、さらにその傾向を強めるという結果から、一層強く表れてこざるをえない。」（中西新太郎『若者たちに何が起こっているのか』花伝社、2004 年、182 頁。傍点引用者）

自己の所属を社会関係のなかに見いだすことが困難にさせられるような孤立と孤独のなかで、アイデンティティが依拠すべき関係性を剥奪され、それ故にこそ、残された親密圏的な共同性に脅迫的な自己のアイデンティティを託しようとする様相をここに見て取ることができる。そして競争や暴力がそのなかで不断に再生産されるような歪みをともなった居場所をめぐるポリティックスが、奇妙なことにアイデンティティ・ポリティックスへと様相を反転し、同調と排除が激しく繰り返される場となる。政治的あるいはエスニックな、あるいは地域的な集団の持つ共同性が投げ込まれる政治的葛藤の世界において呼び覚まされるアイデンティティに対して、このアイデンティティの「私秘化」の下では、消費をめぐる「個性」競争、私的グループ内における支配と被支配、支配権をめぐるパワーゲーム、いじめゲーム等々の、ある意味でそれ自体は極度に非政治的なゲームの中で、所属（居場所）それ自体をめぐってアイデンティティ・ポリティックスが展開する。土井隆義が描き出す個性をめぐる激しいコミュニケーションの戦場は、このような私秘化されたアイデンティティ・ポリティックスの場としてとらえることができる[(15)]。しかしこのポリティックス

Hosei University Repository

は、社会的、歴史的課題に対する主体形成としての意味を持ち得ないが故に、永遠の同調と排除を繰り返すこととなる。

中西は、その点に関して以下のような見通しを述べている。

「社会的承認の問題ですけれども、消費社会のなかで他者によって承認されるという消費社会の承認形式が極めて不安定で浮動的なものであるのはいうまでもないことですが、しかし不安定で浮動性を持つ承認形式と、その中でのパワーゲームとが、90年代の変化のなかでは、安全確保の戦術にもとづいて再編されるという新しい様相を帯びてきているのではないか、つまり、どういう格好で自分がこの社会の中にいていいと認められるか、という問題が、どういう人間がこの社会の中にいてはいけないのかを確定するパワーゲームの問題として、より一層純化されたかたちで表に出てきている。したがって自分を承認してもらうためには、相互承認組織としての小集団がたくさんないといけないことになってきます。この相互承認組織としての小集団が、場合によってはカルト的な集団も含めて、叢生する可能性が日常的にはらまれる。」（中西、同上、184頁、傍点引用者）

そのような意味においては、今子ども、青年のあいだで展開している不安定でいじめへの強い傾斜を持った関係性の展開は、極度に孤立化され、他者との関係性を断つ生活と「自己責任意識」の虜となった日本社会において、社会・政治的現実のポリティックスからは切り離された空間――まさに私的な、社会に閉ざされた空間――で展開するアイデンティティ・ゲームとして把握することができる。

注意しなければならないことは、このようなアイデンティティ・ゲームは、アイデンティティへの欲求を高めこそすれ、かえってそれ故に孤立と孤独をより深化させ、いわばアイデンティティの飢餓状態とも言うべき事態を拡大する。いわゆるプチナショナリズム現象は、こういう飢餓状態にある若者たちが、社会的クライシスとも言える状況においてに共通の課題関心に押し込められたときに、真の政治的理解を欠いたままで一挙に政治的アイデンティティの覚醒状態へとむかう事態としてとらえることができるだろう。

このような「私秘化」されたアイデンティティ・ゲームにおいて、個性とは、自らの固有の位置（居場所）を確保するためのアイテムとしてとらえられてい

Hosei University Repository

る。したがってそこでは自己の能力やキャラ（キャラクター＝演じられ装われる性格）や自己を飾るアクセサリーや所有する商品の他者との差異性が個性としてとらえられている。しかしその個性は、その集団における居場所確保のパワーポリティックスにおいて意味を持つものでなくてはならない。そのためには、その差異性は、集団の同一性の範囲の中に収まっていなければならない。もしそれを超えるときは、個性は自己の孤立化を促進し、居場所を剥奪され排除される要因となる。個性発揮は、常に集団の同調性の枠内に閉じ込められるという力学が働く。

4)「自己責任」の論理を打ち破る

このようなアイデンティティの私秘化の背景には社会との関係性をたたれているが故に、共同性への渇望に導かれて、居場所を求めるという、いわば自己目的化した群れ合いが多様に出現するという事態がある。しかしそれは、決して困難性の共通の基盤に対する共通意識によって結ばれたものではないように思われる。「自己責任」の論理は、個人に内面化されたときに、社会の問題を共通の社会問題として認識する回路をふさいでしまう。そこで居場所の確保によって獲得されるアイデンティティとは、その私的な集団のなかにおける共依存的な仕組みによって与えられる不安定なアイデンティティであり、その集団への囚われを突き抜けて日々展開する社会そのもの、自分の存在を規定している社会との関係性において自己を位置づけるものとはなりにくいと思われる。むしろ社会から閉ざされた空間と関係性のなかに、生きることの意味自体を閉じ込めてしまう。それは社会において生きる意味を剥奪されたものの癒やしの場であり得るとしても、歴史的現実に自己をかかわらせる能動的なアイデンティティを与えるものとはなり得ない。

同調による居場所を確保するための群れ合いは、自己責任イデオロギーを突破するためにこそ求められる困難の共有を妨げる。むしろ自己責任として押しつけられた大きな困難、その思いをその場に持ち出さないことが、居場所を確保し続けるために必要となる。そこでは最も人間的な意味における自己表現と共感能力を働かせて、自己の思いを表現し、その集団自体を内部から組み替え、共通の課題に取り組むつながりをそこから再度立ち上げていくという関係性の

Hosei University Repository

改造力が抑制されているのである。アイデンティティの形成、再構成とは、社会に対する耐えざる主体的再適応であり、主体性の再構築の過程でなければならない。自己のアイデンティティを真に付託することのできる関係性を創り出すためには、自分に対する社会的規定性を意識的に引き受け、その点で課題を共有できる新しい関係性を作り、その関係性のなかにおいて自己をエンパワーしていく社会参加のルートを切りひらく必要がある。

個性とアイデンティティ――個性論⑧のまとめとして

アイデンティティ概念は、常にそのなかに二つの側面を持っていると把握することができる。その第一は、まさに自己同一性とこの概念が規定される側面であり、時間的経過を貫いて個人が同一の人格として連続していると自覚できる一貫性（意識、目的、主体性、身体、等々において）のもとに把握されるということである。その第二は、その個としての人格が、社会的に意味付与されて、自己の存在が社会的にアイデンティファイされているという側面である。

エリクソンの定義では、「自我同一性（ego identity）」の「感覚 sense」とは「自我が特定の社会的現実の枠組みのなかで定義されている自我 a defined ego へと発達しつつあるという確信」（傍点引用者）[14] と述べられている。そもそも自己同一性概念は、完全な孤立と孤独のなかでは達成し得ないものなのである。さらにまたアイデンティティは自己と他者の相互の認識と感覚によって初めて成立するものであることも指摘されている。

> 「そもそも、一つの人格的な同一性 personal identity を持っているという意識的な感情 conscious feeling は、同時に行われる二つの観察に基づいている。つまりそれは、時間的な自分の自己同一 self-semeness と continuity の直接的な知覚と、他者が自己の同一と連続性を認知しているという事実の同時的な知覚である。私が提示する自我同一性とは、この人格的な同一性によって伝えられるような、ただ単に存在するという事実以上のものであって、むしろ個の存在の自我性質 ego quality に関する概念である。」（E・H・エリクソン、小此木敬吾訳『自我同一性』誠信書房、1973 年、10 頁）

Hosei University Repository

そしてこの二つの側面は不可分に統一されているととらえられる。自己の同一性（アイデンティティ）は、絶えず新しい生活行為において創造される自己に即して再構築されるべきものであり、その創造は、社会関係のなかでしか意味を与えられないのである。創造とは、外界としての社会に対して、それに対処し、それに働きかける行為であり、自己は、同一性を保持しつつ、新らしく展開する関係性のなかにたえず再創造され続けなければ、社会の側から自己の存在の意味が支え続けられることもなくなるのである。個性とは、そのプロセスのなかにおいて、存在の固有性の軌跡として創造され、感得され、記録され続けるものなのである。そしてその過程のなかで、自己の存在（be）に統合された諸能力や身体、所有（have）の全体が自己にとって愛しい、かけがえのないものとして、個性を支えるものとして、とらえられるのである。

自分の存在が固有の意味を持ち、それを生きることが他者にとっても意味があると自ら確信できるとき、間違いなく、自分の存在は、非代替性を持ったものとして了解することができる。自己実現が、同時に社会の創造の一環を担うという性格において統一されるとき、個性は社会化され、社会の中において個性が実証される。アイデンティティとは、そのような自己の同一性――他者の誰でもない固有の自己であることの連続性において、次々に創造される自己を捉えることのできる感覚――であり、そのアイデンティティの下に把握された自己存在の非代替的価値性が、個性として把握されるのである。

あとがき　この個性論ノートは、この第８回をもって完結、終了します。８回の連載の機会を与えてくださったキャリアデザイン学会紀要編集部（①～⑤）とキャリアデザイン学部紀要編集部（⑥～⑧）にあらためてお礼申し上げます。第１回にも述べたように、私にとってのキャリアデザイン学への挑戦としてお読みいただければ幸いです。全体としていまだノートの形ですので、機会をみて完成した論考として完成させる予定です。今までの「個性論ノート」に対してご批判、ご意見をいただければ幸いです。　2011－12－30

Hosei University Repository

［注］

(1) 細見和之『アイデンティティ／他者性』岩波書店、1999年。細見は、「人間という主体に関しても、その『心理』や『自我』だけがアイデンティティのありかではない、ということを確認しておきたい。それは他でもない、身体あるいは生命という側面である。そして、このような身体という次元にこそ、ぼくが本書で『アイデンティティ／他者性』という問題を考える際の背景にしたいと思っている問題に他ならないのである。」と述べている（3頁）。今回の「個性論⑧」で検討してみたいことは、細見のいうような他者性を持った身体性の形で人が所有する（あるいは背負わされている）能力や学力とアイデンティティとの関係である。

(2) アンソニー・ギデンズ著、秋吉美都他訳『モダニティーと自己アイデンティティ』Harvest、2005年。「幼児には動機がなく、欲求と要求だけがある。もちろん、赤ん坊も、受動的な有機体ではない。養育者が課そうとする体制がどのようなものであれ、それに反応することで、自分の要求に養育者が応えることを能動的にしきりに促す存在である。とはいっても、欲求は動機ではない。というのも、欲求は実現されるべき状況を認知的に予期するということ――すなわち動機の定義的特徴――を含んでいないからである。動機は本質的に、存在論的安心が生み出される学習過程と共に、不安から生まれる。」（70頁）ここでは、動機という心的過程が、幼児期の「基本的信頼感」の形成を土台として他者（信頼できる他者）に要求するという能動的意思が形成されるということと、自己の身体から発する欠乏を心理的な「不安」として意識することを介して（すなわち自己自身の心理的要求として把握し直すことを介して）、その回復を他者に求める「主体的な」要求となることで形成されるということが述べられている。動機とは、意識（的存在）としての私自身によって把握された意味化された欲求ととらえることができる。

(3) アンソニー・デンズ、同上、36頁

(4) アンソニー・ギデンズ、同上、「ライフスタイルは、ルーティーン化された実践であり、服装、食事、行為の様式、他者と出会うのに好ましい環境などに関する習慣に組み込まれているルーティーンである。とはいえ、従われるルーティーンは移ろいやすい自己アイデンティティに照らして再帰的に変化させられているものである。日々なされる全ての些細な決断――なにを着るか、なにを食べるか、仕事でどのように行動する

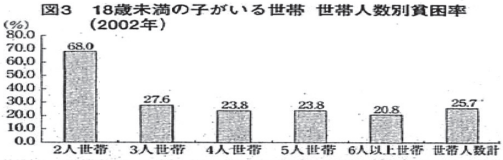
Hosei University Repository

か、そのあと晩に誰と会うか――が、そのようなルーティーンを構成する。全てのこのような選択は（より重要で決定的な選択と同じく）どのように行為するかについてだけではなく、誰になるかについての決断である。個人が活動する舞台が伝統から切り離されると、ますますライフスタイルは自己アイデンティティの核に、アイデンティティの構築と再構築に関わるようになる。」(90 頁)

(5)「人間関係のネットワークとしての社会関係資本の商品化の動向として新自由主義を把握することが出来る。そのとき、個性を浮かび上がらせていた関係性が、商品化されることによって、その個性そのものが浮遊する。新自由主義が固有にこの『関係性を収奪する』システムを解明することで、今日の個性のありよう、人と人との共同性の有り様をどう回復するかの戦略が見えてくる。」中西「リアルな不平等と幻想の自由」『平等主義が福祉をすくう』青木書店 2005 年。

(6) 天野春子「家族形態の変容と家計の変化」（雑誌『経済』2011 年 11 月号、新日本出版社）による。右の図表は、天野氏作成のデータ表。

図3　18歳未満の子がいる世帯　世帯人数別貧困率（2002年）



資料：この推計は、一橋大学経済研究所社会科学統計情報センターで提供している就業構造基本調査（2002年）の秘匿処理済みミクロデータを用いて行った。貧困基準は、生活保護被保護世帯の「最低生活費」の世帯人数別全国平均値をベースとし、「賃金・給料が主な収入の世帯向け」のみ、それに給与所得控除を加えた額を用いた。

(7) 後藤道夫「データから読む子育て世代の貧困」雑誌『経済』2009 年 12 月号による。次のグラフは、後藤氏作成のもの。

表 1　一般世帯の家族類型別世帯数の推移

（単位：千世帯）

世帯の家族類型 ＼ 年			1995	2000	2005	2010
総数			43,900	46,782	49,063	50,928
親族のみの世帯		総数	32,450	33,595	34,246	34,553
	核家族世帯	総数	25,703	27,273	28,327	29,060
		夫婦のみの世帯	7,606	8,823	9,625	10,003
		夫婦と子どもから成る世帯	15,014	14,904	14,631	14,588
		男親と子どもから成る世帯	477	535	605	689
		女親と子どもから成る世帯	2,606	3,011	3,465	3,780
	核家族以外の世帯	総数	6,747	6,322	5,919	5,493
		夫婦と両親から成る世帯	227	238	246	235
		夫婦と一人親から成る世帯	635	697	737	725
		夫婦、子どもと両親から成る世帯	1,715	1,438	1,177	984
		夫婦、子どもと一人親から成る世帯	2,320	2,079	1,819	1,576
		夫婦と他の親族から成る世帯	118	122	124	120
		夫婦,子供と他の親族から成る世帯	329	369	411	450
		夫婦,親と他の親族から成る世帯	125	119	113	105
		夫婦,子供,親と他の親族から成る世帯	546	460	414	362
		兄弟姉妹のみから成る世帯	259	290	307	330
		他に分類されない世帯	474	511	571	606
非親族を含む世帯			211	276	360	467
単独世帯			11,239	12,911	14,457	15,885

（注）1995年から2005年までの数値は、2010年新分類区分による遡及集計結果による。
（出所）総務省統計局『国勢調査』より作成、2010年は抽出速報集計データ。

Hosei University Repository

(8) 門脇厚司『子どもの社会力』岩波新書、1999年、参照。

(9) もちろんこの動向には、ある種の不可避性も含まれている。保育を見てみると明らかなように、現代社会では、一定の専門性を持った保育士が、保育園という公的な施設において働き、そこで保育が高い水準で展開されるという方向が不可避になっている。公教育も歴史的にみれば同じような経過をたどったとみることもできる。それは、資本主義の展開が、地域共同体のなかに深く埋め込まれていた労働と生活、子育てと教育の機能を解体し、労働の機能とそれが伴っていた協同性を企業の主催する生産システムに組み込み、人びとの消費生活を家族単位に分断し、さらには個人化していくなかで、教育や保育を目的とした独自の社会制度を設けることが不可避となったことによっている。また社会の進展とともに、教育や保育の高い水準が求められ、専門性を持った労働者がその仕事に当たることが不可欠になってきたことをも反映している。老人介護などについても同じことが指摘できる。これらは、家族や親しい協同関係のなかで営まれてきたケア関係を社会化したものである。その場合にはかならずしも親密圏において展開してきた人格的な交わりを剥奪したというより、それを公共的な制度の中で――あるいはその援助の中で――営まれる人格的交流関係として再組織したものと把握することができる。もちろんそのように社会制度化され、親密な関係を持ったもの同士のケア関係が、一定の専門性を持った労働者とサービス受給者との関係に置き換わることによる新たな問題性がそこに生じることは不可避となる。しかし、そのような公共システムにおいては、サービス受給者の要求の提示と、それに応えるべく高度化される専門性の発展によって、その問題性の解決が常に課題として取り組まれる。教育、保育、介護等が権利として保障されなければならないとする認識の下に行われるならば、そこでは、人格的関係性の豊かさ、その向上のための努力が設置者の義務となり、また専門性の課題ともなる。だからこそ、対人サービス労働においては、その労働がいかなる価値を担うべきかについての自律的探究のための専門的自由をも保障されなければならない。

(10) 保育をめぐる市場化、民営化の実態と問題点については、『教育』2012年2月号、国土社、「小特集＝子ども・子育て新システムの問題点」の大宮勇雄論文「子育て新システムの問題点」を参照。

Hosei University Repository

(11) ユンゲル・ハーバーマス『コミュニケーション的行為の理論(中)』(未来社、1986 年) 22 頁。

(12) 同上、49 頁。

(13) 小牧治・村上隆夫『人と思想・ハーバーマス』参照。生活世界とシステムとの関係の展開については、以下の指摘を参照。なお、ここには、ハーバーマスのマルクスの理論への批判――資本による労働者の搾取に対する抵抗をとおして社会変革主体が形成されるという論理への批判――が前提としてある。しかし、今日の日本の労働の現実が、資本主義的労資関係に起因して多くの労働者の困難や矛盾を引き起こし、批判と抵抗を呼び起こしている事態を視野におくならば、労働の現実とその場を、現在の支配的システムに対する実践的かつ思想的抵抗の基盤として把握することのリアリティーを無視することはできないと思われる。

「ハーバーマスは、現代資本主義社会がそのシステムの『制御機能を生活世界の病理で肩代わりさせるということ』のうちに、この社会に対する批判とその変革のための突破口を見出す。……社会変革への圧力は、もはやかつてのように物質的な富をめぐる『分配』の問題から生ずるのではなく、生活世界における意味資源の保全をめぐる問題から生じる、とハーバーマスは論じる。資本主義的な経済システムの下での物質的再生産が自然環境の生態学的メカニズムに依存しているように、この経済システムや国家・行政システムの下での社会的な相互関係の再生産は、生活世界のコミュニケーション論的メカニズムに依存している。そして自然環境の保護が資本主義的な経済システムの発展にとっての限界をなすように、経済システムや国家・行政システムは、生活世界における意味資源の再生産過程を保護することなしには存続し得ないのである。そしてこの再生産過程は、コミュニケーション的行為とその妥当性要求に関する討論を通じてのみ進行するのであって、これをシステムに組み込んで目的合理的な行為によって科学的・技術的に制御することはできないのである。こうして社会変革にかかわる抗争は今日では『システムと生活世界との接点のところで』発生することになる、とハーバーマスは論ずる。システムのますます増大する複雑性が、『文化的再生産や社会化といった領域』に徐々に歴史的に蓄積されてきた『再生

Hosei University Repository

不可能な生活世界のストック』を破壊してしまうことへの抵抗をとおして、今日の社会変革は展望されるのである。」(171－172 頁、傍点引用者)

(14) 花崎皋平『アイデンティティと共生の哲学』筑摩書房、1993 年。花崎は、ラジニ・コタリの『エスニシティ――アイデンティティ、紛争、危機』に依拠しつつ次のように述べている。

「文化的アイデンティティやエスニックなアイデンティティを硬直化させ、エスニック紛争とコミュナリズムの暴力化を生じさせるものは、それを同化、均質化させるはずの近代化の成長であったという逆説的な事態が今日、各地でみられる。多様なアイデンティティをいれていた社会空間が近代化の進展によってせばめられたために、アイデンティティは希薄化しないで、『他者』を排斥することで自己主張する否定的なものに転じたのである。／コミュナリズムの暴力化は、宗教的アイデンティティの感情それ自身の表現ではない。それは肯定的で多様なアイデンティティが、否定へ方向付けられ、党派主義へと導かれたものの表現である。……(中略)……。／大規模な国家の介入を通じて推進される開発と近代化がもたらす見かけ上の成長は、不平等(差別)を拡大し、社会の脆弱性と不安定性をつよめる。人びとは希少な資源と利益のために競争しあうようになり、そしてそのためには組織化が有効であることを知る。エスニック集団化は、そうした過程の産物である。それは国家と交渉するための一方法となる。不平等な結果を前にして、各個人、各集団は、自分の損は他者の得、他者の成功は、言語、宗教、カーストあるは地域による集団がよく組織されていることの結果であると解釈する。そして、経済的利害をめぐる争点が、文化的アイデンティティの防衛の争いとして意味変化させらる。『彼ら』が栄えれば『われわれ』が奪われる。『彼ら』が職を得れば『われわれ』が職を失う……と。」(148－149 頁、傍点引用者)

(15) 土井隆義『「個性」を煽られる子どもたち』岩波ブックレット、2004 年、『友だち地獄』ちくま新書、2008 年、参照。

(16) E・H・エリクソン、小此木敬吾訳『自我同一性』誠信書房、1973 年、10 頁。

Hosei University Repository

ABSTRACT

A Research Note of Individuality（8）

Hiroshi SANUKI

I grasp individuality as the character of non-replacement of one's existence. The character of non-replacement is proved in relations with others. One must develop relations and life with others by things (his possessions, body and ability, given to oneself) for one's self-realization. For that purpose, one must use his physical body (a body as the possession) as a means which realizes his existence. but, when one feels the powerlessness of his possessions (body), he becomes not acceptable to his possessions (body), and he becomes antagonistic to his possessions (body). That body becomes non-replaceable for himself when it begins to work as thing to shoulder the own individuality. At that time, a person can accept one's own body. The body includes his own ability. That can be called “reaching an amicable settlement with one’s body”. At that time, a person combines his possessions to him, and he can realize the individuality of ones existence in higher dimension.

Identity is the concept to get meaning of one's existence by choosing social position, the own purpose and duty to society. We must create the cooperation which shoulders actual social ,historical problems together to build the real identity. The individuality is grasped as non-replaceable character of self-existence which is identified by one's own social, historical purpose. Therefore, the individuality of own existence is deeply connected with the identity.